
死後の行き先

部屋内妄想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死後の行き先

【Nコード】

N5871N

【作者名】

部屋内妄想

【あらすじ】

死んだ男はどこに行くのか

深い話ではないのであしからず
ライトな文体かと思います
そして、中身もない

気が付いたら市役所のような空間に俺はいた。丁寧に磨かれた床に観葉植物や待つ為の椅子が置かれ、窓口がいくつも連なっており、忙しそうに応対をしている。

訳が分からない。俺は自室で首吊りをして死んだはずだ。なのに、何故こんな場所で目覚める？ 病院のベッドなら失敗したと判断

できるが、役所に突っ立って意識が戻るのはありえない。

身体はある。首も痛くはない。いったいどうしたんだ。

「14564番になります」

唐突に背後から声を掛けられ振り向くと、歩いてきたスーツ姿の長い髪の女性に紙切れを渡された。それには言われた数列と、窓口の番号が書かれている。

「かなり掛かりますから、外に出てみたらいかがですか？ 順番になったら呼びますんで」

「俺は何故ここにいるんだ」

冷静を装い聞くと、女性は柔和な笑みを称え、

「あなたは死んだんですよ」

そうなのか。ここはどこだ。

「あなたはこれより、死後の処遇が決められるんです」

「じゃあ、ここは天国でも地獄でもないのか」

「はい。ここはそれらを繋ぐ中継所といったところでしょうか。天国地獄の他にもありますが」

やれやれ。死後にも色々あるらしい。なんにしても無になるのではなく、こうして意識あるのは苦痛でしかない。

「わかった。外にでも行ってる。何時間くらい掛かる？」

女性は今度は苦笑いに変わり、

「三日くらい掛かるかと。最近は来る方が多くてこちらでも忙しくて困りますよー」

三日か。まあ、仕方ない。俺も自らここに来てあんたらの仕事を忙しくしてる一人だからな。

外は普通に、この世の街並があった。時刻は夜。空にはまさしく宝石を散りばめたような星空がネオンが輝くビルとビルの間から見える。生きていたなら拝めないような、都会の空気に汚されてない美しい夜空だ。

普通に人が歩いてるが、心なしに暗い風貌の奴が多い。俺もその一人か。

街では、一通りの施設が揃っていて、どれも金がいらないうのとこだ。時間を潰すどころか足りないほどの街だな。おまけに腹も減らない。死んでるから当たり前だが。

俺はそれらの施設で適当に暇をつぶし、審判の時まで待った。

「あ、来たんですね」

三日前に会った女性が意外そうな表情で、結構な挨拶を交わしてきた。

「まだ早かったか」

「いえ、もうすぐですが。呼んでも戻らない方も多くて……」

なるほど。あの街に心を捕らわれた奴も多いわけか。あの充実ぶりならば何十年時間があっても足りなさそうだ。

「もし、戻らなかったら？」

興味本意の質問に、女性はニコリと笑って一言、

「別に構いません」

そう言って更に、

「ですが、次の場所に進む手段はなくなり、ここで過ごし続けるこ

とになります」

俺は肩をすくめた。今は楽しくても娯楽はそんな万能じゃない。いつかは楽しめなくなるだろうな。よくできた話だ。

『14564番の方』

呼ばれたようだ。はてさて地獄か天国かはたまたそれ以外の場所か。聞きに行くとするか。

「あちらの窓口ですね」

手で窓口を示す女性に小さく会釈をし、俺はゆっくりと窓口に立つ。

透明な板を挟んで、椅子に座るのはメガネを掛けた女性。この人も美人の部類に入るだろう。俺を一目見たあと、束ねられた書類をペラペラと華奢な指でめくり、一枚引き抜いた。

「あなたの行く先は――」

書類に視線を落としたまま、読み上げようとして、ここで何かをいい倦めるかのように言葉が詰まる。別に行く先がどこだろうと驚きはしないさ。マグマの中だろうが、極寒の海だろうが、俺が想像もしえない異空間だろうが、どこだろうとな。

女性は顔を上げ、俺の顔を見て、一つ息を整えた後続きを言った。くだらないバラエティ番組ならここでCMでも入りそうな間だったな。

「地獄城になります」

じごくじょう。つまりは地獄ってことか。城ってところに言い倦める何かがあったりしそうだな。

「こちらの書類を持って、あちらのゲートに行ってください」

「ああ」

と、適当な返事で書類を受け取り指示されたとおり、『ゲート』と木札に書かれた扉を開ける。

中は奥が暗闇に包まれた先の見えない空間だった。建築設計上、百メートルはないのは確かだろうが、そんな常識が通じないかもな。後ろ手に扉を閉めると、完全な闇が支配する。

壁に手を当てながら、ゆっくりと歩を進める。

感覚的には五十メートルは歩いただろうか。まさに突然、黒しかなかった視界が一瞬で白しかなかった。暗闇に目が慣れた時に懐中電灯を向けられたような、そんな強い光に自然と目を腕で覆う。

「……ここは？」

光が収まった頃合いで腕を下ろすと、先ほどとは違った場所にいた。

さっきまでは暗闇だったが、違うとすぐに分かる。俺がいたのは小さな部屋だからだ。四方を壁に囲まれ、出入り口だろうドアが一つ。床はフローリングで小綺麗なワンルームといった装いだ。

後ろを振り向くと、ドア枠があった。

枠だけだ。ドアの輪郭だけが部屋の中央にある。そこから俺が来たのかね。試しに輪を通してみたが、反対側にでるだけで、ただのイかれた芸術家が創ったオブジェでしかない。

「ま、驚きはしないが」

一人つぶやき、俺は部屋を出た。

すぐ近くの重厚な大きな扉を開け、入ってみる。

「お、来たか」

開けて早々、声を掛けてきたのは、青い髪 of 青年であった。部屋は書斎のように左右に色んな本などが入った棚が並び、床には書類らしき紙が散らばっているのがイヤでも視界に入る。

「あの、ここは？」

俺が訊ねると、青年は笑みを浮かべ、こちらに歩み寄ると、俺の肩に手を乗せ、

「んじゃ、今日から君がこの城の管理者だ。あとはよろぴこ！」

軽すぎる口調でそう言って青年は部屋から出て行った。

うん。さすがにこれには驚いた。

もう一つ驚いたのは、何故か俺がこれから何をすべきか分かることなんだ。まるで始めからここでその役割をこなしていたかのよう

にな。

「あら、エンマ様は？」

俺が立ち尽くしていると、スーツ姿の女性がそう言って入ってきた。光輝くような金髪に、青い瞳。まさしく外人のような風貌で、身体も外人規格だ。

「さっき、出て行きましたよ」

「……その気は……もしかして、エンマ様に力を貰いましたか？」
女性は聞いてきた。力とかはよく分からないが、

「えっと、何か記憶がおかしくはなってます。ここでどういう事をすれば分かるといいますか……」

女性は、一旦ため息を吐いて、

「そうですか。恐らくは同時に力も受けとったかと。……困りましたね」

「俺も同じくだ。いったいどういうことですか？」

「簡単に言いますと、逃げたんですよ。あなたに仕事を押しつけて。前々から、そんな気配はありましたが」

なんてはた迷惑な話だ。

「仕方ありませんね。おそらくはもうしばらく戻ってこないでしょうから、あなたにエンマ様の仕事をして貰いますね」

はた迷惑な話だ。二回目。

「まあ、あの書類の山を見れば大変なのはよく分かる。だが、そんな簡単に決め手いいのか？」

「内容は既に分かっているんでしょう？　でしたら問題はありますん」

地獄の者は勝手な奴が多いな。俺はやれやれとため息を吐いた。

エンマの仕事。それは死んだ人の行き先の最終的な決定を下す事。

もつとも、既に行き先とかの判断はほぼ決められた状態で回ってくるから、簡潔な略歴を見て、よほど間違っていない限りはそのまま調印するだけ。

つまりはほとんど判子を押すだけである。俺の場合はエンマが仕事を押しつけるために改ざんしたらしいがな。優秀な部下が発案したプロジェクトにGOサインだす無能な上司と変わらん仕事だ。

「これもお願いします」

金髪の女性。秘書が書類の山をドサリと机に置いた。今、地震があったなら書類に埋まってしまうくらいの量が机には既に乗っている。

「多すぎるな。エンマが逃げるのも分かる気がする」

「仕方ないです。最近では自殺が多いですから。よくお分かりでしょう？」

皮肉を交えて秘書は言う。

「しかし、死んでる数はそんな大きく変わってはいないんじゃないか？ 根拠のない俺の考えだが」

俺が担当してるのは日本の死者だけだが、自殺で死ぬ数だけでそんなに仕事は増えはしないと思うが。病気や事故が大半だろうし。

「自殺が問題なんです。簡潔に話しますと、手続きが複雑で、まだ、終わってない人もたくさんいます。あなたも何日か待たされたでしょう？」

「三日だったな」

「それでも早い方ですよ。余程生きてる間の中身がなく、早く処理されたんでしょう。ですが、病死や事故の場合は遅くとも一週間、ほとんどの場合は一、二日で終わります。自死の場合は、早くで一週間。遅くて一年は掛かったケースもあります」

言葉に棘が紛れ込んでるのが気にはなるが、自殺者の数は増えていったし、自殺と処理されない数も多いという噂もあるし、実際は三万よりもっといるのだろう。

「……まあ、よく分からんが、自殺者が多いから仕事も多くなる…

…と」

「そうですね」

やるべき役目の記憶は受け取ったが、システムまでは一切合切分らないな。

何も余計なことは考えずにこなしていくしかないか。

しかし、死んだ後に仕事ができるようになるとはな。それも重要な仕事だ。とんだ皮肉だな。

死んだら無になってなくなる。

そんなオカルトに支配されていない考えが、とんだオカルトだったらしい。

こうして死後の世界はちゃんとあったんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5871n/>

死後の行き先

2010年10月8日14時25分発行